公募研究　A03　（課題番号：06208207・07205206）

グスク出土の貿易陶磁器資料の集成とその情報化

研究代表者：亀井明徳・専修大学・文学部・教授

１．研究項目：琉球・沖縄の政治と社会

２．研究課題名：グスク出土の貿易陶磁器資料の集成とその情報化（課題番号：06208207・07205206）

３．研究期間：平成６年度・平成７年度

４．交付研究費：平成６年度　1,400 千円
　　平成７年度　1,100 千円　　合計　2,500 千円

５．研究組織(氏名・所属機関・部局・職)：
(研究代表者)亀井　明徳・専修大学・文学部・教授
(研究分担者)吉井　　宏　・東北福祉大学・助教授(平成６年度)
(研究分担者)手塚　直樹・鎌倉考古学研究所・所長(平成７年度)

６．研究目的

琉球王国が中国・朝鮮・タイ・ベトナムなどから陶瓷器を交易品として入手していた最盛期は 14～16 世紀であり，現在確認できる約 420 個所のグスクのすべてから，これらの貿易陶瓷器が出土している．本研究の目的は，これらの資料化をはかり，琉球の対外交易研究に活用しようとするものである．さらにあわせて，発掘資料の散逸を防止するための基本台帳作成の役割を果たし，沖縄の文化財保存に資することを目的とする．

７．研究実施計画

沖縄県内にはおよそ 420 個所のグスクがあり，それらのほとんどから貿易陶瓷器の出土をみる．しかし，本研究の目的にかなう遺跡，すなわちある程度発掘調査が進行し，相当量の陶磁器を出土し，かつそれらが研究対象となりうる条件を具えているグスクは限られてくる．本島の北部から掲げると，今帰仁グスク・勝連グスク・座喜味グスク・浦添グスク・首里城・大里グスク・佐敷グスクなどである．

その中でも勝連グスクは，沖縄復帰以前の琉球政府文化財保護委員会，以後の沖縄県教育委員会などによって発掘調査が実施され，主要部分の発掘がほぼ終了し，その概要がつかめる状況にある．そ

して，出土した貿易陶磁器は，14 世紀から 15 世紀におよぶ大量，かつ大型で良質な青磁，本土においては出土数のきわめて少ない元代の青花白瓷をはじめとして，タイ・ベトナムの陶磁器をふくみ，質・量ともに沖縄におけるグスク出土陶磁器の１級資料の地位をもっている．そこでこのグスク出土の貿易陶磁器を重点的に再調査し，他のグスク出土品を加えて，調査を計画した．

調査は，これらの出土品が保管されている沖縄県教育委員会・沖縄県立博物館・勝連町教育委員会の承諾を得て，写真撮影（カラースライド）を主とし，実測図の作成，個々の陶片の調書作成をおこなう．そして，これらの全資料をコンピューターに入力する．すなわち，カラースライド，実測図に，出土位置・陶片観察等の文字情報を加え，画像処理ソフト「桐」を用い加工し，データベースの帳票画面にはめ込み，同一帳票画面上に表示をする．

８．研究経過

平成 6 年度ならびに 7 年度の 2 年間にわたり継続して調査を実施し，その経過は以下のとおりである．

平成 6 年度

1983 年度出土資料の調査：勝連グスク跡本丸南側城壁調査出土陶磁器（勝連町教育委員会収蔵施設保管）カラースライド 31 枚，実測破片数 50 点

1984 年度出土資料の調査：勝連グスク跡南貝塚・二の丸地点出土陶磁器（勝連町教育委員会収蔵施設保管）カラースライド 64 枚，実測破片数 127 点

1983 年ジョージ・H・ケア採集資料（沖縄県立博物館保管）カラースライド 57 枚，実測破片数 87 点

その他勝連グスク跡採集資料（沖縄県立博物館保管）カラースライド 5 枚

平成 7 年度

旧琉球政府文化財調査委員会発掘資料の写真撮影ならびに実測調査（沖縄県立博物館保管）　カラースライド 81 枚，実測図 107 点

勝連グスク以外の出土品の内，今帰仁・浦添・首里グスクの調査．

これらの出土資料の情報は，35㎜ リバーサル・フイルムと実大の実測図で作成し，これを画像読み取り装置のカラーイメージ・スキャナーを用い，データをコンピューターに入力し，この写真資料と，通常画像入力により得られた実測図を，画像処理ソフト「桐」を用い加工し，データベースの帳票画面にはめ込み，同時に文字情報も入力した．これにより，資料の出土状況や特徴の記載された同一帳票画面上に，写真・実測図を表示した．

９．研究成果の概要

勝連グスクを中心にして，沖縄のグスク出土の貿易陶磁器のデータベース化をはかった．これらの資料の整理を通じて，琉球における東南アジア交易について研究をすすめた．その概要は以下のとおりである．なお，詳細は「琉球陶磁貿易の構造的理解」専修大学人文紀要 60，1997 を参照されたい．

琉球国から東南アジア諸国への咨文のなかに，土産の蘇木や胡椒などを収買するための搭載物貨として，「磁器」あるいは「磁器等物（貨）」と『歴代宝案』に記載されており，磁器以外には具体的な品目はあげられていない．一例をあげると，「本国は貢物稀少なり．…磁器を装載して，前みて貴国の出産地面に往き，胡椒・蘇木等の貨を収買して回国し，以て大明御前への進貢に備えんとす」（『歴代宝案』洪熙元年　月　日暹羅国宛咨文）と記されている．すなわち南蛮交易における琉球国の搭載交

易品の主たるものはつねに「磁器」であり，琉球国の交易にとって磁器，いうまでもなく中国陶磁器のもつ意義はきわめて大きいと言える．

そこで琉球の進貢貿易によって，中国からどのぐらいの量の陶磁器がもたらされたのであろうか，正確な数字をあげることは出来ないが，グスクの出土量を基礎数字としてわずかな手がかりはつかめる．今帰仁グスク跡の志慶真門郭は広大なこのグスクの一部分にすぎないが，1983 年の発掘調査報告に基づくと，青磁，白磁，青花の総破片数 10,955 であり，これに褐釉陶器が加わる．勝連グスク跡の一の郭では，1981 年までの発掘調査による出土陶磁器は，7,626 片である．いずれも グスクの一部分の調査であり，この 数字の数倍の量である 2 万から 5 万がこの種の大規模グスクにおける陶磁器の保有量の総数であろう．

沖縄県内のグスク総数は約 420 個所あり，小規模なグスクも多いの で，上記の今帰仁や勝連を基準にすると誤るので，中規模で全域調査ほぼ完了している読谷村座喜味グスクを例として 1 グスク平均 3,500 個と少な目に仮定すると約 150 万個の陶磁器がグスクだけで保有されていたこととなる．これに奄美のグスクが 28 ヵ所確認されており，さらに大型グスクの保有量は桁外れに大きいので，この数字はさらに大きくなるであろう．

『李朝実録』成宗 10 年(1479）には，国中の市において「磁器」が取引され，また首里においては「羹は小磁器に盛り，又磁楪あり」と，一般にも日常的に磁器使用の状況がうかがわれるので，グスク以外の日常的な消費量は累計すると，グスク保有量に匹敵する数字であろう．すなわち，琉球国内に主として嘉靖以前に輸入，消費された中国陶磁器の総量は 300 万個に達しているであろう．

1 回の進貢貿易によって琉球にもたらされる陶磁器の量を推定する唯一の史料として，賜与品ではあるが，つぎの史料がある．『太宗実録』洪武 7 年 12 月(1374）乙卯条「琉球国に使いして，その王察慶に文綺二十匹，陶器一千事，鉄釜十口を賜り，文綺百匹，…陶器六万九千五百事，鉄釜九百九十口を以て，その国の馬を市す」．頒賜品と合わせると，70､500 事の陶磁器が琉球にもたらされ，『明史』洪武 7 年冬条では「陶器七万」と記載されているこの数字は，1 回の船に積載されている陶磁器の標準的な数量と想定できる．

琉球が泉州および福州からもたらした陶磁器の数量を示す史料は上記以外にないので，1 回あたり 7 万点と仮定し，明代 270 年間に 171 回の進貢貿易船のうち，東南アジ アの派遣船で磁器が搭載物貨として記録されている最後の隆慶 4(1570）までの進貢船は 111 隻であり，したがってもたらされた陶磁器は 777 万点となる．このうちグスクおよび一般消費量として 300 万点が琉球内で需要され，残りの 477 万点が東南アジアに中継貿易された計算になる．

沖縄のグスクの多くは 15 世紀中葉頃に大きく変質するが，出土陶磁器についても，これ以降 16 世紀に入って嘉靖期を中心とした青花が登場するまで，青磁は減少する傾向がある．首里グスクのように 15 世紀中葉以前から継続しているグスクにおいても，15 世紀後半の陶磁器，とりわけ青磁の出土は少ないようである．15 世紀中葉に初源をもつと考えられている御物グスにおいては，遺跡が基地内にあるため調査が不十分であるという制約のもとでの推定であるが，青磁の碗・盤では定型化した施文で種類が限定されており，勝連グスクなどに比較して質的低下は否めないこと，白磁は，粗製の皿が多く，また小型で粗製の坏のしめる割合が多いこと，青花が一定の割合で組みあわさること等があげられる．

東南アジアにおいて，明代の中国陶磁器を出土する良好な遺跡はない．しかし，琉球から満剌加国

へ「青大盤二十箇，小青盤七百箇，青碗二千箇 」にみられるように（『歴代宝案』洪熙元年―成化 6 年)，青磁を主として中継貿易され，後には青花に変更されていると考える．逆にタイ，ベトナム陶磁器は沖縄の遺跡から発見されている．ベトナム白磁鉄絵，青花，青磁は今帰仁グスクから出土し，14 世紀後半―15 世紀とみられる．タイ陶磁は黒褐釉と鉄絵陶器を主として今帰仁グスク，勝連グスクなどから発見されている．またハンネラと俗称されている印文土器は沖縄では 20 ヶ所近くの遺跡から検出されている．これらの出土量は全体としてきわめて少なく，交易品とは考えられない．

沖縄県におけるタイ陶磁器の出土件数は，他の地域よりも相対的に多いが，それでも 20 個所にみたず，200 片程度であり，中国陶磁器に比すべくもなく，タイ陶磁器が貿易品としてもたらされたものではない事は歴然としている。今後の発掘調査の進展によって，出土例の増加はあろうとも，こうした傾向性は動かないであろう．以上の前提のもとで出土品をみると，ｼｰｻｯﾁｬﾅﾗｲ（サワンカローク）窯製と考えられている鉄絵瓶・香合・壷，黒褐釉双耳瓶などが，今帰仁グスク跡と博多遺跡群から共通してみられるが，他の地域には少ない．いわゆるハンネラと俗称されている土師質壷・蓋においても両地域に多く他に少ないという特徴がある．これらは 14 世紀後半―15 世紀前半代に位置づけられ，それより以後ではみられない．博多が暹羅―琉球の延長線の終点にあったことをこれらの遺物は示しているのであろう．

10．主要研究業績

『福建省古窯跡出土陶瓷器の研究』（単著）都北出版社，1995

「琉球陶磁貿易の構造的理解」専修人文論集 60 号，専修大学学会，1997

11．情報化資料の概要―沖縄県勝連城跡の画像ファイルの扱いについて

(１)本文資料および画像資料は、データベース『桐』VER.5 のうえで扱うものです。

(２)画像ファイルは、桐の表のうえで、画像資料Ａ(瓷片写真)、および画像資料Ｂ(瓷片実測図面)の両種があります。画像資料Ａは瓷片写真の高品位描写が必要なため、国際標準規格の JPEG の形式で持ちます。また、画像資料Ｂは『桐』の標準画像処理 GRP の形式で持ちます。

(３)JPEG 形式ファイルをモニターに表示するには、通常の 640*400ドット(もちろんマルチスキャンモニターでも可) モニターに「フレームメモリー(自然画表示ボード)」が必要です。NEC の 9801 シリーズでは拡張ボード用スロットに取り付けることになります。カノープス株式会社の『 PhotoPAQ-98 』が適当な機種です。

(４)画像ファイル名について、画像ファイル名は基本的に報告書の図版番号と図中の瓷片整理番号により付けられています。例えば

「勝連城跡」84 年報告書　　図 54　　(瓷片)14～25 までの場合

４５４１４－２５．ＪＰＧ または ４５４１４@２５．ＪＰＧ

と表示し、各数字は

４…84 年の４

５４…図 54 の５４

１４…瓷片整理開始番号の１４

－ OR @ … －は外壁面写真。@は見込面写真。

２５…瓷片整理終了番号の２５

．ＪＰＧ は拡張子

の意味を持ちます。

また、ケア氏および勝連城報告書に未掲載の瓷片については、それぞれ

ケ１１９－１２４．ＪＰＧ　または　ケ１１９@１２４．ＪＰＧ

カツレ１２－２４．ＪＰＧ　または　カツレ１２@２４．ＪＰＧ

と、瓷片整理一連番号のみで記載してあります。

実測図面のファイル名は、

先頭に“＃”を付けて“ － OR @ ”を省略します。

．ＧＲＰの拡張子を持ちます。上述の例では

＃４５４１４２５．ＧＲＰと表示します。

５．画像資料のモニター上での表示サイズについて

画像資料ＡのＪＰＥＧファイルは、桐の帳票画面にはめ込むために、460*285 のサイズで作られています。

画像資料ＢのＧＲＰファイルは、画像サイズの固定はしていません。それは桐の画像表示画面上で、640*400 を越すサイズの画像をカーソルキーで自在に移動表示ができるからです。(詳細は桐のリファレンスを見て下さい)